

スポンサー様各位

5th Kundang invitational Jet Sports Challenge 2013

開催日

8/31・9/1

開催場所

クندان・マレーシア

出場クラス

2st Drag Race

4st Drag Race

Pro R/A 800 Open

Pro R/A 4st Open

結果

2st Drag Race : 2 位

4st Drag Race : 2 位

Pro R/A 800 Open Moto#1:1 位
Moto#2:2 位
Moto#3:レースキャンセル

Pro R/A 4st Open Moto#1:マシントラブルによってリタイア
Moto#2:レースキャンセル
Moto#3:レースキャンセル

まず初めに今大会でお亡くなりになられた Ron Tan 選手のご冥福をお祈りいたします。

今大会のレース会場は少し大きな池のような場所で行われるため、波が一切立ちません。従って、船の速い選手がホールショットを獲ったまま逃げ切るといったパターンがほとんどでした。

土曜日には Drag Race が行われました。2st Open クラスには SPX で参戦し、4st Open クラスには RXP-X のスーパーチャージャー艇で参戦しました。どちらのクラスでも勝ち残ってはいたものの、決勝において 2st Open・4st Open 共にトップスピードの差で負けました。

日曜日にはクローズドのレースが行われました。午前中には Pro R/A 800 Open の Moto#1・Moto#2 と Pro R/A 4st Open の Moto#1 が行われました。

Pro R/A 800 Open の Moto#1 では、スタートが上手く決まりアウトグリッドのホールショットを獲得しました。しかしドラッグレースで優勝した選手がインコースのホールショットを獲得し 1 番にホームストレートを通じたため、自分はその選手に続いて 2 位でホームストレートを通りました。コーナーではどうにか詰めることができるものの、ストレートで置いてかれてしまうようなレース展開でした。その中でもレース中盤にバックストレートエンドのコーナーで 1 位の選手がミスをした為、その一瞬を突いて 1 位に浮上しました。その後はそのまま逃げ切って 1 位でのゴールとなりました。

Pro R/A 800 Open の Moto#2 でもアウトコースのホールショットでした。今回はどうかホームストレートで並びかけるとこまでいけたものの、ストレート後のブイまでには先行されてしまいました。その後は常に相手のミス待ちで背後を走っていたものの、1 度もチャンスが無く 2 位のままゴールとなってしまいました。

Pro R/A 4st Open ではインコースのホールショットでホームストレートも 1 位で通過しました。しかし、3 周目にスーパーチャージャーのギアが壊れてしまい、ブーストが全くからなくなってしまいました。ツーリングレベルでは走る事は可能でしたが、Moto#2 のレースに備えて修理をするために早々にリタイアを決めました。

午後からは残りのレースが行われる予定でしたが、自分のレースの直前に行われた Veteran R/A 4st Open で死亡事故が起きた為、レースはキャンセルされました。そしてその後は追悼ランを行い、大会が終了となりました。

レースを終えての感想

今大会ではとても悲しい出来事が起こりました。自分は初めてレースでの死亡事故を目の前で見たため、とても他人事のように思っていられませんでした。また、今もこうして自分が生きていて、楽しくジェットスキーに乗ってレースを続けていられる事に感謝をしなければいけないと同時に思いました。今後もこのような事故には気を付けつつも、彼の為にレース界で活躍をしていきたいと思えます。

次のレースは JJSF 全日本選手権の二色の浜にて行われる最終戦に参戦します。今年度のポイントランキングではもう全日本チャンピオンになれる可能性はありませんが、3位までには入れる可能性があります。従って最終戦では優勝をして、どうかポイントランキングでは3位以内に入れるように頑張りたいと思えます。

今後とも応援の程宜しくお願い致します!!

Ron Tan 選手の死亡事故に関して（個人的な意見です。）

僕は、その全てを自分の目で、しかも目前で見ました。今回の死亡事故には、後で判明した事も、ロガーを確認して判った事も多々あり、一概に全てを把握しているとは言い切れませんが、一プロライダーとしての意見を記載いたします。

この事故は、オープンランナバウトクラスで発生しました。事故自体は、単独の落水事故です。しかし Ron 選手は、元ペトロナス ジェットスキー レーシングチーム(マレーシアワークスチーム)の選手で、数多くの勝利を経験し、現在もなおマレーシアのベテランクラスで圧倒的な速さを見せている方でした。その方が、単独の落水で死亡とは、あまりにも考えにくいですが、それが事実です。

多くの不幸な事が重なったと思えます。昨今のオープンランナバウトのボートは、130kmをゆうに超えます。Ron 選手の艇も SEA-DOO のターボ艇で、マレーシアでは常にホールショットを獲る艇でした。今回も、彼はホールショットを獲りました。そして、コースは高速型コースだったと言えます。彼は、フルスロットル（ロガーでは 130km 以上）時に落水しました（1週目）。この原因は、艇に何らか（足回り等）の問題があったと思われる。（オープンランナバウトクラスのライダーは、身も凍る事だと思えます。現実的に、死が隣り合わせだと言う事です。）しかし、彼にはまだ意識があり、レース続行の意思を示し、最後尾からの再スタートをしました。彼は薄れゆく意識の中で、レーサーの本能として前艇を全力で追いかけたと思えます。そして、2週目のホームストレートに帰ってきました。観客の前をターボ艇の爆音とともに全開で走り抜けた瞬間、その爆音が一瞬にして消えました。艇はエンジンが止まり惰性でホームストレートを進んでいます。Ron 選手は、その艇を追い越す感じで前方へ飛んで行っています。この時も、ロガーでは 130km を超えていました。その後、彼は前方へゴロゴロと水面を転がって行きます。目撃情報、カメラ、ロガー等により、Ron 選手は、2週目の落水の寸前に意識を失っていたとの見解に達しました。

そして、その後の落水で首の骨が折れ、ほぼ即死状態でした。

なぜ、1回目の落水後にテントへ戻らなかったのか…。非常に悔やまれますが、同じレーサーとして気持ちは分からなくも無いです。但し、残される家族、仲間の為に、引く勇気の大事さを感じました。レースは次もあるが、本当に死んだら全て終わります。この事を、本当の意味で分かっているレーサーはどれだけいるのでしょうか？ 残された者の本当の悲しみが分かるレーサーは、どれだけいるのでしょうか？ 生きてこそ出来る事がきっとあるはずです。その事を、僕達は絶対に忘れてはいけないと思います。その事が理解出来ないのであれば、どんなに素晴らしいレーサーでもスタートラインに立つ資格が僕は無いと思いました。それだけ残された家族、仲間の悲しみは大きかったです。

今回のレスキュー活動はとても早く、迅速なレスキューを行いました。レースディレクターも、迅速にレッドフラッグを出し、レーサー自体も皆で協力してレスキュー活動をしました。しかし、非常に残念な事にレスキューを行った時点で既に呼吸は止まっていました。従って、僕的にはレース主催者に非は無いと思っています。但し、主催者へ一言言わせて頂いた事は、コース設定に関してです。現在のマシンは、本当に速度が速いです。不意な水面の変化や、艇の挙動の変化で落水は意図も簡単に起こるでしょう。なので、高速コースからテクニカルコースへの変更を意見しました。テクニカルコースにする事で、速度を落とし、それが重大事故を減らす事になると思います。昨今の艇の速さは誰も止める事は出来ません。なので、それをコース的にして欲しいと伝えました。それが、唯一主催者が出来る事なのではとレース後に進言しました。主催者からは、前向きに次回のコースレイアウトを検討すると言ってくれました。

レースと言う時点で、完全に事故を無くす事は無理かもしれません。しかし、みんなの意思でそれを減らす事は出来ると思います。そして、悲しむ方々を減らせると思います。今回、色々考えさせられたレースでした。ライダーズミーティングで話をし、スタート前にも話をしたライダーが今はこの世におらず、その仲間の骨を今海に流してる…。これは、現実です。こんな悲しい事があってはなりません。僕を含め、レーサーのみなさん、もう一度家族や愛する人、仲間の事を心に浮かべてからスタートラインに並びましょう。そして、レース後笑う人、泣く人、怒る人、あって良いと思います。それがレースだと思いません。そして、自分の足で大事な人のもとへ帰りましょう。それが、簡単な事じゃ無い事は僕も良く判っています。でも、それがスタートラインへ行く僕達のもう一つの使命だと思います。若輩者の僕が、生意気な事を言っていると叱られるとは思いますが、僕が一番言いたいのは悲しむ人を無くしたいと言う事です。僕は、今後それを特に胸に秘めてスタートラインへ向かおうと思います。そして、プロとして良い意味で熱いレースを皆さんへお見せ出来ればと願っています。皆様のご理解が得られれば幸いです。

Team WPS Japan

小原 聡将

今回は、レース自体の写真を割愛させて頂きました事をご了承ください。



右の写真は、Ron 選手死亡確認後、全選手でレース海面を追悼ランを実施した写真です。



Ron 選手の息子さんが火葬した骨持ち、Ron 選手の愛艇で骨を流す海面まで行きました。
艇を下せる選手は、自分の艇で、艇が無い関係者は船でその場所へ向かいました。

